ジェンダー研究会・第 4 回勉強会

2008 年 7 月 17 日

映画における同性愛・ジェンダー表象について

阿部　未華

★LGBT 映画史を概観しよう！

【参考文献:出雲まろう編『虹の彼方に～レズビアン・ゲイ・クィア映画を読む』パンドラ・現代書館、2005 年】

- **初期…吸血鬼、怪物、殺人鬼としてのレズビアン・ゲイ・クィア・イメージ**

ハリウッド映画では、作中において同性愛者を隠すとともに表現し続けてきた。

例)『チャップリンの舞台裏』(監督チャールズ・チャップリン、1916 年)→笑いの対象

『フランケンシュタインの花嫁』(監督ジェイムズ・ホエール、1935 年)、『女ドラキュラ』(監督ランバート・ヒルヤー、1936 年)、『ロープ』(監督アルフレッド・ヒッチコック、1948 年)→モンスター化

『去年の夏、突然に』(監督ジョゼフ・L・マンキウィッツ、原作トルーマン・カポーティ、1960 年)→男の関心を引きたい男性主人公が村の子供たちに暴行され殺される＝『フランケンシュタインの花嫁』と同じ構図

⇒当事者にとって、モンスター化されながらも、映画にその存在に描かれただけでうれしいというアンビバレントな感情をもたらした。登場人物の孤独や苦悩の中に共感を見出し、存在の特異性を誇りとした。

…このようなクィア・イメージとしての殺人鬼・吸血鬼ストーリーは、80 年代以降も継承される。

例)『エミリーの窓』(監督ゴードン・ウィリス、1980 年)、『羊たちの沈黙』(監督ジョナサン・デミ、1991 年)、『氷の微笑』(監督ポール・バーホーベン、1992 年)

…そのような状況の中で、国連による「国際婦人年」活動によって、それまで男性の領域であった映画製作現場に多くの女性監督を輩出し、『ジュリア』(監督フレッド・ジンネマン、1977 年)、『バグダッド・カフェ』(監督パーシー・アドロン、1987 年)など女同士の友愛をそれまでにはない力強さで描いた作品が登場し、同時代の女性たちに共感をもって受け入れられた。

…80 年代初頭、エイズの悲劇によって、レズビアン・ゲイ・コミュニティに変化が訪れる。政府や製薬会社に対して ACT-UP などの活動団体が声を上げ、レズビアンとゲイの間にそれまでなかった連帯が生まれ、やがて力強いアクエィヴィズムとなって、多くの主要大都市にデモやパレードなどを推進していった。

- **1982 年－1991 年…変化の感触**

このような動きを背景に、映画界も変化。

同性愛は映画において重要なテーマになり、多様なジェンダー/セクシュアリティがこれまでのような否定的要素だけではなく描かれた作品が登場しはじめる。

…80 年代半ばにはベルリン映画祭にゲイ・レズビアン部門としてテディ・ベア賞が設けられる。

- **1992 年－1996 年…ニュー・クィア・フィルムの勢い**

90 年代には映画の世界においてもゲイ・ブームが起こる。世界主要都市でゲイ・レズビアン映画祭が開催され、かつてはその存在を隠され、あるいは歪んだ形で表現されたレズビアン・ゲイ・クィア・イメージは映画作品において隠された存在ではなくなる。

例）『オルランド』（監督サリー・ポッター、1992 年、英/露/伊/仏/オランダ）
『女たちの禁じられた恋』（監督アレリン・ウィズマン、リン・ファーニ、1992 年、カナダ）
『ターチ・トリップ』（監督大木裕之、1992 年、日本）
『さらば、わが愛　覇王別姫』（監督チェン・カイコー、1993 年、香港）
『フィラデルフィア』（監督ジョナサン・デミ、1993 年、アメリカ）

- **1997 年－2000 年…クィア映画の多様性**

レズビアン・ゲイ・クィアが必ずしも主役でなくとも、重要な脇役としても存在するようになる。

例）ぼくのバラ色の人生』（監督アラン・ベルリネール、1997 年、ベルギー/フランス/イギリス）
『ブエノスアイレス』（監督ウォン・カーウァイ、1997 年、香港）
『ボーイズ・ドント・クライ』（監督キンバリー・ピアース、1999 年、アメリカ）
『マルコヴィッチの穴』（監督スパイク・ジョーンズ、1999 年、アメリカ）
『御法度』（監督大島渚、1999 年、日本）

- **2000 年－2004 年…ブームを超えて**

希望の兆しが見えた映画界であったが、9.11 以後、世界情勢が急激に対立、戦争、保守化へ向かっており、レズビアン・ゲイ・当事者にとって、今後どのように揺り戻しが来るのか予断を許さない状況に。

例）『バンジージャンプする』（監督キム・デスン、2001 年、韓国）
『マルホンド・ドライブ』（監督デビッット・リンチ、2001 年、アメリカ）→ハリウッドの伝統的な負のイメージ
『翼をください』（監督レア・プール、2001 年、カナダ）
『8 人の女たち』（監督フランソワ・オゾン、2002 年、フランス）
『エレファント』（監督ガス・ヴァン・サント、2003 年、アメリカ）
『夏の突風』（監督マルコ・クロイツパイントナー、2004 年、ドイツ）

〈「変化の感触」期の作品紹介〉

『アナザウェイ』（監督マック・カーロイ、1982 年、ハンガリー）

1950 年代後半のブダペストが舞台。女性ジャーナリスト・エバの短い一生を描く。レズビアン映画。エバの思いを受け入れる勇気がなかったリビアは、エバが故郷に去ってから彼女を追ってエバの元に行く。しかし、嫉妬に狂った夫の銃撃を受けてリビアは再起不能に。退院後に一緒に暮らそうという、最後の申し出をリビアに拒まれ、エバは国を出るが、国境付近で警備隊に射殺される。

『ハーヴェイ・ミルク』（監督ロバート・エプスタイン、1984 年、アメリカ）

サンフランシコで、1977 年にアメリカで初めてゲイとして公表し、市政執行委員選挙に当選したハーヴェイ・ミルクを描いたドキュメンタリー映画。可決が確実視されていた「提案 6 号」（レズビアンやゲイの教師を学校から追放しようとする反同性愛的な法案）を廃案に追い込むなどの偉業を成しとげるが、それによって同僚議員であるダン・ホワイトによって当時のサンフランシスコ市長ジョージ・モスコーニとともに、市庁舎内で射殺される。

『カラーパープル』（監督スティーブン・スピルバーグ、1985 年、アメリカ）
1910 年代、大勢の黒人が南部から北部へ移住し始め、ブルースやジャズといった黒人芸能が商業化した時代が舞台。レズビアン映画。主人公セリーは、夫の愛人であるブルース歌手シャグによって、初めて人を愛することの悦びを教えられる。シャグは「私たちは似たもの同士」という歌詞の歌をセリーに捧げる。原作に描かれている直接的な性表現は、映画ではカットされている。

『蜘蛛女のキス』（監督ヘクトール・バベンコ、1985 年、ブラジル/アメリカ）
南米のある国が舞台。フェミニンな服装を好み、すでに若くなく、マザコンといったゲイにとってネガティブなイメージを総動員したようなモリーナというキャラクターを描きながらも、少しもネガティブな映画ではない点が評価され、数々の賞を受賞。恋が実るゲイ映画としてはかなり早い時期に作られた作品と言えるが、死という結末が待っているのは時代の制約か。

『カラヴァッジオ』（監督デレク・ジャーマン、1986 年、イギリス）
17 世紀イタリアの画家カラヴァッジオを描く。ゲイ映画。カラヴァッジオの同性愛は歴史的に知られている。
『欲望の法則』（監督ペドロ・アルモドバル、1987 年、スペイン）
ゲイの映画監督を主人公のひとりに描く。監督自身もゲイであったことから、自伝的映画であると批評される。
ゲイのパブロとトランスセクシュアルの兄（性転換したため姉）のティナは、彼女のレズビアンのパートナーの娘であるアダを育てている。したがって、パブロがゲイでありながら、伝統的な家族を形成しているような印象をもたらす。

『ヘアースプレー』（監督ジョン・ウォーターズ、1988 年、アメリカ）
1960 年代初頭のアメリカ・ボルチモアが舞台。黒人問題・ファッション・ダンスといった当時の社会現象を取り上げ、太めの女の子トレイシーが人種差別と闘いながらトップ・アイドルになるまでの青春映画。「保守的なアメリカ映画」仕立て。
主人公トレイシーの母親役を、当時 41 歳で太った女装者である女優ディヴァインが演じている。

『トーチング・トリロジー』（監督ポール・ボガード、1988 年、アメリカ）
ドラァグ・クイーン・ショーパブのエンターテイナーであるアーノルドの 10 年間の切ない恋物語。ゲイ・バッシングの脅威と闘いながら、愛し合う男同士が「子供がほしい、養子をもらおう」と真剣に相談し、温かい家庭をつくろうと夢見る。クライマックスでは、ゲイ・バッシングで恋人のアランを亡くした後、アーノルドが彼の墓前で母親と激しく言い争うシーンが描かれている。ゲイの息子を受け入れることの出来ない母親は「お前なんか産まなきゃよかった」と最悪の発言をする。

『パリ・夜は眠らない』（監督ジェニー・リヴィングストン、1990 年、アメリカ）
白人レズビアンである監督が、ニューヨークの黒人やラテン系のゲイ男性を追ったドキュメンタリー映画。

『櫻の園』（監督中原俊、1990 年、日本）
多感な女子高生同士の淡い恋が描かれている。セクシュアリティは意識されていない。

『エドワード 2 世』（監督デレク・ジャーマン、1991 年、イギリス/日本）
ゲイとして知られているイギリスのエドワード 2 世（在位 1308-1327）を、16 世紀末のゲイとして知られている劇作家クリストファー・マーロウの戯曲に基づいて映画化。

『イン・ベッド・ウィズ・マドンナ』（監督アレック・ケシシアン、1991 年、アメリカ）
1990 年のマドンナによるコンサート・ツアーを中心に追跡したドキュメンタリー映画。マドンナの 7 人のバックダンサーのうち 6 人がゲイ男性であることが語られ、ほとんどが黒人かラテン系かアジア系の出身。ツアー中、マドンナはバックダンサーたちを「子ども」と呼び、まるで母親のように接する。マドンナがバックコーラスの女性やバックダンターたちとベッドをともにするシーンが描かれるが、エロチックさを感じさせない。マドンナは白人ヘテロ男性ではなく有色のゲイ男性を登用し、彼女とゲイ男性の間ではエロティシズムは作動しないのである。

★性的マイノリティー基礎用語

・ セックス/ジェンダー
　　:セックス…身体と関係する生物学上の性
　　:ジェンダー…社会的、文化的な性

・ セクシュアリティ:性的欲望の指向性 （ex.ヘテロセクシュアル、ホモセクシュアル）

・ **LGBT**:レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとった呼び名。多くの性的マイノリティの支援団体が当事者について表現する場合に用いられている。

トランスジェンダー（トランス）…広義にはトランスセクシャル、トランスヴェスタイト（クロス・ドレッサー）、インターセクシャル/半陰陽、ユーニック（去勢男性）を含める一般的な用語。狭義には、とくに身体よりも社会的に反対の性として生きようとする意識。

トランスセクシャル…トランスジェンダーの中でも、身体（性器）に違和感のある意識。

トランスヴェスタイト（クロス・ドレッサー）…異性装者。反対の性別の服装を好む人のこと。必ずしもその身体や社会的性別を望むわけではなく、両性の役割を演じたいという欲望を伴う場合が多い。（ヘテロセクシャルの意識であることが多い。）

インターセクシャル/半陰陽…生殖腺や生殖器に直結する部分に見られる雌雄の違いによって性別を判断するのが難しい状態。

・ 性同一性障害（GID）:トランスジェンダーの人が治療を必要とする場合の診断名。身体的な性と、性自認が異なっている状態。